

「異様だ。検察の作為が露骨にうかがわれる」

中山千夏さんの「リブらんか」

(週刊金曜日 2009・7・24 日号)より

「いったいなにが、どうなってんの」
覚えているかな、前回、厚労省の女性局長の逮捕（6月14日）にからめて、「政治案件」について書いた。その時、我ながら注意深くも、こう書いた。
〔でも、この場合、そうだったかどうか、続報が乏しいのでわからない。本人は否定していると聞くから、冤罪の可能性もあると思うよ。〕

らり
んかづ
中山千夏
Nakayama Chiuatsu

7月4日、その村木厚子が起訴された。勾留期限いっぱい目の21日目だ。

当時、村木の部下だった上村勉（5月26日逮捕）、「凜の会」の倉沢邦夫と
河野克史（いずれも4月16日逮捕）も同時に起訴された。

このうち、村木だけは、一貫して容疑を否認したままの起訴だという。そんなに確実に悪いことしたんか。

まとめて新聞報道、読んでみた。

異様だ。少なくとも私には、逮捕当時と同じくらい、村木の容疑はあやふやだ。それどころか、流れをまとめて見ると、検察の作為が露骨にうかがわれる。

部下だった上村は、逮捕されるや容疑（偽の稟議書や証明書を作った）を認めたとしたが、ずっとひとりでやったと言っている。

それが、勾留期限切れの6月11日になって、村木の関与を言い出したことが、「捜査関係者への取材」で明らかになる。同じく「捜査関係者」によると、倉沢も「村木から証明書を受け取った」と言っている、という。村木逮捕はその3日後。

39歳のぼっちゃん役人と、73歳のエライじっちゃんが、長期勾留されての連日の取り調べにうちのめされ、検察の望む供述を絞り出した、と見えるのは、私の僻目だろうか。

逮捕後には、村木がさる国会議員から頼まれた、省内で数回、倉沢と会っていた、複数の厚労省職員が任意聴取に「障害者自立支援法の成立が同課内の絶

対的目標だった」と供述した、などの噂が報道される。

いずれも、検察の「精力的」な証拠固め、動機固めの足跡だろうが、あまりに貧弱な成果ではないか。

局長にまでなろうという女は、私などとは違うだろう。抜け目なく慎重に男社会を泳いでいる。それが、たいしたメリットもないようなことで、危ない橋を渡るとは思えない。

ってところへ聞いてびっくり。村木だけ保釈を許されていない、勾留されっぱなしだというじゃないの。こりゃもう、執念むき出しだね。

それを知ったのは、7月9日、村木の無実を訴え、保釈を求める声明が出たからだ。出したのは、女の労働問題や福祉の政治的分野で、必ずと言っていいほど名が出る、高位のデキる女たち（と男少々）。従って私はあまりお付き合いがないひとたち。

動機がない（事件当時には「障害者自立支援法」はまだ影も形もなかった）、人柄と業績からしてそのような行為をするとは考えられない、と声明は村木の無実の主張を全面的に支持し、早期保釈を求め、裁判への惜しみない支援を誓っている。

村木厚子というひとを私は知らないから、人柄は置いておく。ただ、先に書いたとおり、起訴に足る確実な証拠や動機があるとは、とても思えない。おまけに、証拠隠滅や逃亡の恐れもない淑女を牢屋に入れっぱなしとは、どう考えてもひどい。

しかし不気味なのは、なぜ村木を目の敵にするのか、検察側の動機もはっきりしないことだ。民主叩きと関係あるのか。それとも、近年激しいフェミニズムへの逆襲の一端か。その複合か。気色わる～～。

それにしても。エリートでさえこんな目に会うんじゃ、下々一般ピープル女は、よほど強くなくちゃやっていけないよ。喝！